

【資料】 Tendentious Apperception 偏向した統覚 (後半)p138~139

資料①-1 前回の横山さんの資料より

・ Appendix

Tendentious apperception

The tendency, according to Adler, that all people have to understand new perceptions or novel experiences in terms of their pre-existing network of meanings. … This term is synonymous with biased apperception.
 偏向した統覚：アドラーによれば、新しい知覚や経験を、既に持っている意味のネットワークの視点から理解するために、全ての人を持つ傾向のこと。(中略) この用語は biased apperception と同義語である。

(復習)

●原型 (本書 p.132 より)

prototype とは、人がそれにそって自分自身を鑄型にはめようとする、人物像や概念のこと。その人の目の前にあって、自分もそのようになることに価値がある、と、その人が思うようなもの。ある人がナポレオンのようになりたいと思うならば、ナポレオンがその人の原型、モデルということになる。原型は目標から選ばれ、自分が決して人に凌駕されないような場所の、究極的なイメージの表れである。ある人が、子供時代には消防士に憧れ、大人になると学校の校長になりたいと思ったとしても、パターンと原型は変わっていない。(中略) 子供は、のちに自分が変化し、銀行員あるいは権力を有するそれに似た何かになる、ということを知らない。(しかし) 権力を持つ、人々に指令を与える人になるという原型は不変なのである。

●前回テキストの最後の部分 (横山さんのテキストより引用)

Tendentious apperception can be recognized in people's remarks, in what they mishear, in the way they interpret everything. This has nothing to do with reality but fits their prototype and pattern. Their tendentious apperception becomes repetitious in various situations because people are not oriented to reality but to a preconceived prototype toward which they move. Each person cuts a small segment out of the whole reality into which he or she is born as an infant and now tries to move within it.

偏向した統覚は人々の発言や聞き間違い、物事全ての解釈の仕方に見て取ることができる。これは現実とは何の関係もないが、彼らの原型とパターンには合致する。偏向した統覚は様々な状況で繰り返される。なぜなら人は現実ではなく、彼らの動きが目指している、予め持っていた原型に向いているからである。人はそれぞれ、子供の頃に自分が生まれてきた現実全体から小さな切片を切り取って、今やその中で動こうとするのである。

資料②-1

The science of living p5 ("Undersutanding LIFE" Oneworld,Oxford 2009 より)

(参考:岸見一郎訳『個人心理学講義』p20 一光社 2001年 第4版)

When the prototype - that early personality embodying a goal - g is formed, the individual becomes oriented towards a certain direction. This enables us to predict what will happen later in life.

Individuals apperceptions are from then on likely to fall into the pattern they have established for themselves. Children will perceive situations according to personal schemes of apperception - that is to say, they will see the world through the prejudice of their own goals and interests.

プロトタイプ(目標を具現化した初期の人格)が形成されると、その人はある特定の方向を志向するようになる。これによって、その後の人生で何が起こるかを予測することができる。

それ以降、個人の統覚は、その人自身が確立したパターンに当てはまりやすくなる。子どもたちは、個人的な統覚のスキームに従って状況を認識する。つまり、自分たちの目標や利益という偏見を通して世界を見ることになる。(DeepL)

資料②-2

What Life Should Mean to You (『人生の意味の心理学』私のもっている本は“What Life Could Mean to You” Oneworld,Oxford2009 でした…)

p15 Human beings live in the realm of meanings. We do not experience things in the abstract; we always experience them in human terms. Even at its source our experience is qualified by our human perspective. ……

…But no human being can escape meanings. We experience reality only through the meaning we ascribe to it: not as a thing in itself, but as something interpreted.

人間は意味づけの世界に生きている。我々は純粋な環境を経験することはできない。我々は、我々人間にとっての重要性に関連づけてしか、環境を経験できない。(中略)

いかなる人も、意味づけからのがれることはできない。我々はいつでも、現実を、我々がそれに対して与えた意味づけを通してのみ経験する。すなわち、現実それ自体ではなく、何かしら解釈されたものとして経験する。

『人生の意味の心理学』高尾利数役、春秋社 (『アドラー心理学を語る 1 性格は変えられる』p18 の注より)

資料③-1 前回の横山さんの資料より

●Pattern of Life と Style of Life 2023.3 大竹さんの資料

Pattern of Life p107 (2021.12 粟飯原さん担当部分) 原註 3

…アドラーの著作の中には、この(「人生のパターン」と「ライフスタイル」の)区別が推測できるものがある。「誰もが自分自身と人生の問題についての『考え』を持っており、それは人生のパターンであり、運動の法則であり、本人が理解していなくてもしっかりと掴んでいるのである」(Adler, 1933)。また、アドラーは「性格的特徴は、その人の動線の外側の形にすぎない。そのため、環境、仲間、コミュニティ、人生の問題に対するその人の態度を理解することができる。それは自己主張のための手段を示す現象である。それらは生き方の方法を形成するために結合する装置である」(Ansbacher, 219). と強調している。

その 25 年後、ジッヒャーは、ライフスタイルと人生のパターンの違いに注目することで、アドラーの説明から推測されることを具体化した。彼女にとって、パターンは内的な出来事であり、アドラーの運動の法則の概念に対応するものである。ライフスタイルは観察可能であり、各個人が自分の目標に到達するために使用する方法を表している。

資料③-2

脚注 5:ジッヒャーは、パターンとは(メカニズムと同様に)内的な出来事であり、そのパターンを外的な世界で実現するために使われる手段であるという事実を指摘している。

資料③-3 IPAA p189.

3. CONSTANCY 10

When the prototype- that early personality which embodies the goal _is formed, the line of direction is established and the individual be comes definitely oriented. It is this fact which enables us to predict what will happen later in life. The individual's apperceptions are from then on bound to fall into a groove established by the line of direction. The child will not perceive given situations as they actually exist, but under the prejudice of his own interests.

From now on, the world is seen through a stable schema of apperception: Experiences are interpreted before they are accepted, and the interpretation always accords with the original meaning given to life. Even if this meaning is very gravely mistaken, even if the approach to our problems and tasks brings us continually into misfortunes and agonies, it is never easily relinquished.

By the time a child is five years old his attitude to his environment is usually so fixed and mechanized that it proceeds in more or less the same direction for the rest of his life. His apperception of the external world remains the same. The child is caught in the trap of his perspectives and repeats unceasingly his original mental mechanisms and the resulting actions.

3. 恒常性 10

原型-目標を体現する初期の人格-が形成されると、方向性が定まり、個人は確実に方向づけられる。この事実があるからこそ、その後の人生で何が起るかを予測することができるのである。個人の統覚は、それ以降、方向性の線によって確立された溝に入ることになる。子どもは、与えられた状況を実際に存在するものとして認識するのではなく、自分自身の利益という偏見のもとに認識するようになる。

これ以降、世界は安定した統覚のスキーマを通して見られるようになる：体験は受け入れられる前に解釈され、その解釈は常に人生に与えられた本来の意味と一致する。たとえこの意味が重大な誤りであったとしても、私たちの問題や課題への取り組みが絶えず私たちを不幸や苦悩に陥れるものであったとしても、この意味が簡単に放棄されることはない。

子どもが5歳になる頃には、環境に対する態度は固定化され、機械化される。外界に対する認識も変わらない。子どもは自分の観点の罫にはまり、元の精神的メカニズムとその結果としての行動を絶え間なく繰り返す。

(DeepL)

●スキーマ(英語: schema)、シェーマ(ドイツ語: Schema)、シエマ(フランス語: schéma)とは、もともと図や図式や計画のことを指す言葉で、今では様々な分野で広く用いられる言葉である。

「スキーム」(scheme) とスキーマはほぼ同じ意味であるが、一般にスキームが具体的にほとんど完成された計画や図を意味するのに比べて、スキーマはその手前のおおまかな(概念)状態を指すことが多い。

・哲学において

哲学の存在論の一部において、この世界における存在についての問いと答えのリスト。

カントの哲学における一概念。

・心理学や認知発達の理論において、スキーマとは心理的な描写(心象、概念)のこと。

自己スキーマ - 自己記憶セット

スキーマ療法 - スキーマに焦点を当てた心理療法

・形式論理学における公理型(命題のセットを叙述する規則)のこと。 (Wikipedia より)

資料④『アドラー心理学を語る 1 性格は変えられる』野田俊作 創元社 2016

p16 アドラー心理学の用語で「統覚バイアス」と呼んでいるものがあります。これは、人間は、自分の性格に一致するように外界の出来事に意味づけをするということ。性格というのは、その人固有の信念の体系なんです。思いこみのシステムと言ってもいい。個人の思いこみは、一種の色眼鏡として作用して、その人の信念体系に合致するように、世界を勝手気ままに解釈してしまいます。

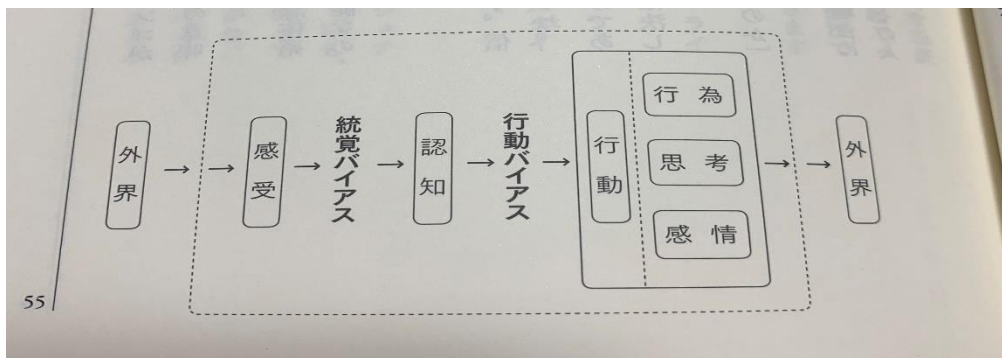
p54 外界の出来事を見たり聞いたりしますね。それが、ただ見えたり聞こえたりしていて、まだ意味づけされていない段階を仮に「感受」と呼んでおきましょう。

づぎに、これに意味づけをして了解しますね。その段階を「認知」と言いましょう。たとえば、赤い丸いものに気がつくのが感受、「ああ、あれはリンゴだ」などと思うのが認知です。

さて、この、感受と認知との間に、その人特有の癖がある。これが「認知パターン」、あるいはアドラー心理学のスラングを使うなら「統覚バイアス」です。

づぎに、認知をして意味づけした結果に基づいて行動を起こしますね。ここで「行動」と言っているのは、筋肉の運動、すなわち「行為」だけではなくて、大脳の働き、すなわち「思考」、それに自律神経の働き、すなわち広い意味での「感情」も含まれます。認知と行動の間にも、その人特有の癖があります。「あれはリンゴだ」思っても、それを食べるとは限らないでしょう。認知と行動との対応関係を、仮に「行動バイアス」とでも呼びましようかね。

ライフスタイルというのは、統覚バイアスと行動バイアスの両方を含めた概念なんです。実際上は統覚バイアスと行動バイアスとを区別することはできません。だから、ひとくちにまとめて「認知行動パターン」だと言っているのです。



★ジッヒャーが分けて考えているという、内的なパターン(Pattern of Life:人生のパターン、運動の法則、“idea”『考え』)を上図の統覚バイアスの部分に対応させることができるかもしれない。

もう一方の観察可能で各個人が目標に到達するために使う方法(Style of Life:ライフスタイル)は上図の行動バイアスと対応させることができそう。

野田先生は、「ライフスタイルというのは、統覚バイアスと行動バイアスの両方を含めた概念なんです。実際上は統覚バイアスと行動バイアスとを区別することはできません。」と書いている。

資料⑤-1 『アドラー心理学を語る 1 性格は変えられる』野田俊作 創元社 2016

p17 向こうから女性が歩いてきて、私を見てふっと目をそらしたとする。それを私は、「僕のことが嫌いだから、軽蔑して目をそらしたんだ」ととるかもしれない。そうしたらそのよに行動するでしょう。あるいは、「僕のことが好きだから恥ずかしくて目をそらしたんだ」ととるかもしれない。そうするとそのよに行動するでしょう。あるいは、「たまたま向こうに彼女の友達でも見えたのかもしれない」ととるかもしれない。そうすると、そのよに行動する…。

その女性が本当はなぜ目をそらしたのかとは関係なく、勝手な思い込みに基づいて、我々は行動する。

このよに、我々は、客観的な出来事に反応して生きているのではなくて、客観的な出来事に対して、自分の信念に基づいて主観的な意味づけをして、それに反応して生きているわけですね。

(中略)

さて、ある人が「私はすべての人に嫌われている。ごらん、あの人だって私のことが嫌いだ。だから目をそらしたんだ」と主張しますね。「いや、あれはあなたを好きだからそうしたのかもしれない」と言ったって、「いや絶対そんなことはない」とその人は言うに決まっている。それが統覚バイアス。(中略)

統覚バイアスがある限り、人は自分の「性格」に一致した、矛盾のないデータしか受け入れないわけです。

(中略)

たとえば、「すべての人は私のことが嫌いだ」と思っている人がいたとします。たまたま誰かがその人のことを好きになったとしますと、その人はすごく不思議に思うわけです。

「そんなはずはない。おかしい、これはきっと、何か下心があるのだろう。結婚詐欺か何かだろう」

と疑いはじめます。そして試しはじめるわけですね。「あなた、本当は私のことなんか好きじゃないのに、何か下心があって、それで私のことを好きなふりをしているんでしょ」と……。そんなことを言うと、そのうち相手は腹を立てて去っていきますよね。そうすると、この人は失望するよりもむしろ安心する。そして「すべての人は私のことが嫌いだ」という信念を確認するわけです。

p24 「性格を変えたい」という願望なり決断なりは、今現在の性格から出てきている決断で、たとえて言えば、自分の髪の毛を引っ張って空へ飛ばうとしているみたいなものです。だから、無理なんですね。

そうではなくて、「今の性格を保つのをやめよう」という決断をすることです。「性格を変えないでおく努力をやめよう」という決断をするのだと言ってもいい。「今までの行動パターンを、とにかく捨てよう」という決断だと言ってもいい。今までの常識を、たとえそれがどんなに正しいと思っても、いったん棚上げにして、虚心坦懐に事態に対応してみようと決断すること。この決断ができる人は変わるんですね。

(中略)

ところが、その決断がなかなかできない。なぜかというところから。

だって、何が起こるかかわからないでしょう。今までのパターンどおりにやっていたら、次に何が起こるかは予知できるわけです。性格とは、その人なりの人生の法則です。

★ある「考え」を持ち続ける限り、ほかのやり方はできない、ということ、すなわち、変わらないでいる努力をしつづけるということ、その目的は、変わると(結果が予測できないので)「こわい」からであり、それはすなわち「Security」であるという目標(目的?)と関係があるのかも。

資料⑤-2 20231012 大竹さん「Useless Patterns and Security 無益なパターンと安全」資料より

5) Security

・“A Student's Glossary of ADLERIAN TERMINOLOGY” より

All our strivings are directed toward a position in which a feeling of security has been achieved, a feeling that all the difficulties of life have been overcome and that we have emerged finally, in relation to the whole situation around us, safe and victorious. (Adler “What life should mean to you.”)

私たちの努力はすべて、安心感、人生のすべての困難を克服したという感覚、そして周囲の状況全体との関係において、最終的に安全で勝利しているという感覚を達成した位置に向けられる。

(中略)

Adler distinguishes between the false goal of ‘security’ that is sought by the neurotic individual and the legitimate goal of security which the normal individual seeks. The neurotic is always pursuing self-centered concern with the protection of his self-esteem. The normal individual equates security with sufficient courage, concern for his fellows and self assurance to meet the challenges of life head on.

アドラーは、神経症的な個人が求める「安全（安心？）」という誤った目標と、正常な個人が求める「安全（安心？）」という正当な目標とを区別している。神経症者は常に自尊心の保護という自己中心的な関心を追求している。正常な個人は、人生の難局に正面から立ち向かう十分な勇気、仲間への関心、自己肯定感と安全（安心）を同一視している。